
僕と幼なじみな新任教師？

まあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と幼なじみな新任教師？

【NZコード】

N8230X

【作者名】

まあ

【あらすじ】

バカとテストと召喚獣の一次創作小説です。文月学園に1人の教師が赴任しました。新任教師『久島蓮夜』は常識から逸脱している生徒達がそういう文月学園でどんな生活をするんでしょうか？

第一問（前書き）

毎度、おなじみのまあです。

『思いつき』の昇格です。まだやるのかよ。他もあるのにいい加減にしきよと叫び声も聞こえますが気にしない方向でお願いします。

思いつきで書いた時と設定が変わつてきます事を『』で承べだれ。

第1問

「久島蓮夜ね。高校は進学校、大学時代に海外留学経験あり?……」

久島蓮夜は文月学園の教師に空きが出たと知り、採用試験の内容を電話で問い合わせたのだがその日に学園に来るようになると言われ、現在は文月学園の学園長室で『藤堂カヲル』学園長の前に立せられている。

(……何か居づらい)

蓮夜は広い学園長室に2人つきりであり、居心地が悪そうにしていると、

「あんた、大学で留学までしておいでどうして教師になろうとなんて思つたんだい? この成績ならあつちで就職先なんていくらでもあつただろ」

「それは、高校時代に恩師とも言える先生に出会えたからです。そんな先生のようになりたいと思いました」

「……今の時代、そんなの流行らないさね」

「そうかも知れません」

学園長は蓮夜の学歴でこの学園の教師を希望する理由がわからないようすで首を傾げると蓮夜は少しだけ照れくさそうに笑い、学園長は蓮夜の言葉にため息を吐ぐが蓮夜の答えが気に入つたようであり、

「採用さね。今日から働いて貰うよ。廊下で待つてな。誰かに案内させるから」

「採用？ 今日から？ へ？」

「何だい？ 何か問題あるのかい？」

「い、いえ、すいません。いきなりす、ぎて頭が処理できていませんでした。あ、ありがとうございました」

学園長は蓮夜を採用すると笑うと蓮夜は採用試験を受けたその日に同格通知が貰えるとは思つていなかつたようで間の抜けた表情になると学園長は楽しそうに笑い、蓮夜は一度、深呼吸をして自分を落ち着かせると学園長に向かつて深々と頭を下げ、

「そうだ。久島先生、あんたには2年Fクラスの副担任と授業全般を受け持つてもらつからね」

「え？ 担当教科は英語でと言つ話でしたが

「あんたの能力ならできるだろ。それにうちのFクラスは特殊でね。西村先生だけだと人手が足りないんだよ。それがあつての採用試験だしね」

「そうですか。わかりました。それでは失礼します」

学園長は蓮夜にかなりの無茶な条件を言い渡すが蓮夜はあまり気にした様子もなく頭を下げると学園長室を出て行き、

「……まさか、こんなに有能な人材が転がつてるとはね。良い拾い

ものだつたね。能力が履歴書通りだつたら、正規も考えてみようかね」

学園長は蓮夜の背中を見送ると蓮夜の第1印象で有能だと判断した
よつとくすりと笑うと、

「……高橋先生、あたしだよ。さつき、採用試験を受けたのを採用
したから、誰か案内を頼むよ。名前は久島蓮夜だよ。履歴書を見る
限りと印象では有能みたいだからね。正規雇用も考へてあるからし
っかりと頼むよ」

「久島蓮夜ですか？」

職員室に内線をかけ、『高橋洋子』教諭に蓮夜の案内を頼むと電話
の先の洋子は蓮夜の名前に何かあるのか首を傾げる。

「ん？ 知りあいかい？ ああ、そう言えば同じ大学だつたね」

「そうですか。あの、久島くんがですか。わかりました」

学園長は洋子の出身大学が蓮夜と同じだと思いましたので学園長
からでた言葉に洋子は蓮夜が自分の知っている人間と同一人物だと
理解したようであり、

「案内の件、わかりました」

「ん。それじゃあ、頼むよ」

学園長は洋子に蓮夜を任せると内線を切る。

第2問

「……学園祭の準備期間なのに野球か」

「懐かしいですか？ 久島くん」

蓮夜は廊下の窓から野球をしている生徒達を見て苦笑いを浮かべると彼の背後から一見えない地味な男性が声をかける。

「ふ、福原先生！？ お久しぶりです」

「はい。久しぶりですね。久島くん……いえ、久島先生と呼ばないといけないでしょ？ うか？」

蓮夜は振り返るとその男性は蓮夜が教師を志すきっかけになつた恩師である『福原慎』教諭であり、慌てて頭を下げると福原教諭はかつての教え子が成長した姿を見る事が出来た事が嬉しいようで柔軟な笑みを浮かべ、

「えーと、福原先生に先生と呼ばれるとなんか恥ずかしいですし、それに俺は臨時職員ですし、長居もできるかはわからないですからなれている方が良いです」

「ダメですよ。久島先生、生徒の目もありますから、学生気分では困ります」

「は、はい！？ つて、洋子先輩？ きょ、教師になつていたんですか！？」

蓮夜は苦笑いを浮かべて『くん』付けで良いと答えようとするがそんな彼の考えを否定する女性の声が背後から聞こえ、慌てて振り返るとそこには大学時代の先輩である洋子が立つており、蓮夜の態度では生徒に示しが付かないと言いたげである。

「はい。久島先生の受け持つ2学年の学年主任をやらせていただいている。Fクラスはいろいろと大変だと思いますがお互いに協力して行きましょう」

「学年主任？ 本当にですか？ その若さで」

「文月学園は生徒に限らず実戦主義ですから、能力のある人が上のポストにつけるんですよ。久島先生も頑張って臨時職員ではなく、正規職員になれるように頑張ってください。学園長先生も期待しているようでしたよ」

「は、はい。尊敬する福原先生や洋子先輩と同じ学校で教鞭を振るつて行けるなら、どんな事でも努力します」

洋子は慌てる蓮夜の様子にくすりと笑うと蓮夜は他の学校ではありえないであろう人事に顔を引きつらせるが福原教諭は蓮夜にも努力をすれば正規の職員にもなれると蓮夜を応援すると蓮夜は大きく頷き、

「久島先生、黄、言つていた尊敬する先生と言つのは福原先生なんですか？」

「はい。福原先生です」

「そうですか」

洋子は蓮夜の様子に以前、彼が話してくれた恩師の事を思い出した
ようで蓮夜が大学時代と変わつていない事に昔を少しだけ懐かしん
でいるのか柔らかい笑みを浮かべると、

「久島先生、学園の案内は私と福原先生で受け持ります」

「よろしくお願ひします」

「はい。それとですね。生徒の日もありますから『先輩』は止める
ようだ」

「わ、わかりました。高橋先生」

洋子は蓮夜が昔と変わらない事に安心したようでもくすべすと笑うと
蓮夜は慌てて頭を下げる、

「それでは行きましょうか？ 案内が終わつたら西村先生にFクラス
を紹介していただきたいといけないといけないでしょしね」

「はい。よろしくお願ひします……あの、学園長先生も高橋先生も
Fクラスは大変だつて言つてましたけど、何かあるんですか？」

「……久島先生、それはおいおい話をしまじょ」

「高橋先生、視線を逸らされると不安しか感じないんですねけど…？」

福原教諭は蓮夜の案内を済ませようと歩き始めると蓮夜は自分が受け持つ2年Fクラスの話を聞こいつとするが洋子は蓮夜から視線を逸らす。

第3問

「それでは、久島先生、行きましょうか？」

「はい。西村先生、よろしくお願ひします」

学園設備の案内が終わるとFクラスの担任の『西村宗一』教諭に引き継ぎをされてこれから授業を受け持つ事になるFクラスへと向かう事になる。

「久島先生は臨時職員を続けていたと聞きましたが、どうして正規の職員にならないんですか？」

「なかなか、タイミングが合わなくて後は私以上に有能な先生はたくさんいますから……西村先生、さっきも見ていたらなんですが、旧校舎の方は酷いですね」

蓮夜は西村教諭と少し話をしながらFクラスの教室に向かうのだがFクラスの教室のある旧校舎に足を踏み入れると新校舎との違いに苦笑いを浮かべると、

「まあ、文月学園のカリキュラムでは仕方のない事なんだが」

「実戦主義ですか。それでも、ここまで酷くなると逆にやる気が失せませんか？」

「……久島先生、文月学園の生徒はそんな人間ではないんですよ」

「そりなんですか？ それをバネにできる生徒が多いなんて教えが

いがあつたんですね

「……いや、そつちの意味ではないんだ。そつであればどれだけ良いか

西村教諭は召喚システムと言ひ特殊なカリキュラムの影響だと苦笑いを浮かべると蓮夜はこんな環境下でも勉強に取り組む事ができる勤勉な生徒がそろつてゐるのだと考えるが西村教諭は眉間にしわを寄せる。

「そつちの意味ではない？ つて事はどういつ事ですか？」

「まあ、見ればわかる。少し待つていてくれないか？」

「はい。わかりました」

蓮夜が首を傾げた時、Fクラスの教室の前に到着したよつて西村教諭は教室の中から聞こえる騒ぎ声に大きくため息を吐き、

「みんな、清涼祭の出し物は決まつたか？」

「今のところ、候補はこの3つです」

教室のドアを開けると生徒達は清涼祭の話し合いをしてゐるよつて少し間の抜けたような男子生徒とポニー・テールの女子生徒を中心には話し合いをしてゐるよつて女子生徒は西村教諭に話し合いで出た清涼祭の出し物の候補の3つを見せる。

「……補習の時間を倍にした方が良いかも知れんな」

(あれ？……ひょっとして、明久か？)

西村教諭は黒板に書かれている3つの候補を見て大きく肩を落とすとFクラスの生徒は西村教諭がため息を吐いた理由を『吉井』と言う男子生徒に責任を押し付け始め、蓮夜はその男子生徒に視線を向けると彼の顔に心当たりがあるようで首を傾げた時、

「馬鹿者！！ みつともない言い訳をするな！！ 先生はバカな吉井を選んだこと 자체がバカな行動だと言っているんだ！！」

「あ、あの。西村先生、それは言い過ぎじゃないでしょ？？」

西村教諭は生徒達が責任を1人の生徒に押し付けた事を叱りつけるがその言葉はどこかおかしく蓮夜は教室に入ると苦笑いを浮かべて西村教諭を止め、

「あ、あれ？ レン兄？」

「アキ、この人と知り合い？ って言つか、誰？」

男子生徒は蓮夜の顔を見て驚きの表情をすると女子生徒は男子生徒の制服を引っ張り、男子生徒に蓮夜の事を聞く。

第4問

「やつぱり、明久か。大きくなつたな」

「ん？ 久島先生は吉井と知り合いでですか？」

「レン兄、先生ってどう言う事！？ つて、頭を撫でないで！？
僕はもう小学生じゃないんだから！？」

蓮夜は男子生徒の反応に彼が幼なじみの『吉井明久』だと確信した
ようでくすりと笑うと彼の頭を撫で、その様子を見て西村教諭は首
を傾げる。

「ん？ 悪いな。どうしても昔の印象つてのは変わらなくてな。西
村先生、明久は俺の幼なじみなんです。明久の両親は共働きですし、
よく家にも遊びに来ていましたので」

「そりなんですか？」

「あのね。印象は変わらないって言つても、レン兄が大学に進学し
てからなんだから、7年も経つんだよ。僕は高校生なんだから」

蓮夜は苦笑いを浮かべると自分と明久が幼なじみだと話し、明久は
変わらない年上の幼なじみの様子に安心しながらも流石に小学生扱
いされている事に大きく肩を落とすと、

「あ、あの。西村先生、そちらの久島先生と言つのは？」

「あれ？ 明久、あの子つて、お前の小学校時代の友達だよな？」

「う、うん。 ただけど」

1人の女子生徒が西村教諭に蓮夜の事を聞き、蓮夜はその女子生徒に何か心当たりがあつたようで明久に女子生徒の事を聞き、明久は頷く。

「そりだよな。 名前は確か……瑞希ちゃん、姫路瑞希ちゃんだ。 明久の……」

「レン兄、 いきなり何を言つんだよ！？」姫路さんに失礼だ？」

蓮夜は昔の記憶を引っ張り出すと明久は蓮夜の口を塞ぎ、

「なるほど、 そり言つ事か？」

「そ、 そり言つ事つて、 どつ言つ事だよ！？」

「まあ、 気にするな。 兄としては弟がしつかりと成長している姿を嬉しく思つてているだけだ」

「……久島先生が吉井と知り合いなのはわかりましたが、 一先ずは生徒達に紹介をせて貰います」

蓮夜は明久の様子に1つの答えを導き出したようでくすりと笑うと西村教諭は蓮夜を一先ず、 生徒達に紹介しようと思つたようで蓮夜と明久の間に割つて入ると、

「 今日から俺以外にFクラス専属の教師を置く事になつた。 それがこの先生だ。 久島先生」

「はい。久島蓮夜です。今日から皆さんと一緒にこの学園でお世話を
になる事になりました。今は臨時職員としての採用ですのでも
で君達を受け持てるかはわかりませんがよろしくお願ひします」

西村教諭は蓮夜を生徒達に紹介し、蓮夜は自己紹介をすると生徒達
に向かって深々と頭を下げる。

「久島先生、俺は生徒指導の方もあるので、クラスをお願いします。
このバカどもは田を放すと野球をしたり遊び始めますので」

「あ、そつき、野球をしていたのはこのクラスですか」

西村教諭は蓮夜に生徒達を任せると囁つと蓮夜は苦笑いを浮かべて
頷き、

「ん。そうだった。お前達、クラスの設備の事なんだが、清涼祭の
稼ぎを設備向上に使つても良いと学園長先生から話があつた。だか
ら、少しあは眞面目に取り組むように、それでは久島先生、よろしく
お願ひします」

「はい。わかりました」

西村教諭は学園長から清涼祭の売上を酷い設備の向上に使つても良
いと許可をもらつた事を生徒達に伝えると教室はざわざわと騒ぎは
じめ、西村教諭は眞面目にやる気になつた生徒達の様子を見て一瞬
だけ表情を緩ませるが直ぐに表情を引き締めると蓮夜に生徒達を任
せて教室を出て行く。

第5問

「それじゃあ、俺は見てるから、話し合ひの続きを」

「久島先生、まとめてくれるんぢやないんですか？」

「えーとですね」

蓮夜は窓ぎわに置いて教師用のパイプ椅子に腰をかけようとする
明久と一緒に話し合ひをまとめていた女子生徒が蓮夜に助けて欲し
いのか声をかける。

「島田、島田美波です」

「島田さんだね。すいません。今日、面接を受けていきなりだつた
から生徒の名前も全然でね」

女子生徒は蓮夜が自分の名前を知らない事に首を傾げた後『島田美
波』と名乗ると蓮夜は苦笑いを浮かべ、

「学園祭は生徒のものだからね。教師である俺が口を出すより、み
んなで話し合つて決めた方が思い出に残ると思ってね。暴走しそぎ
ると少し方向を正せて貰うけど、今はちょっと早いかな」

「やうなんですか？」

「ああ。それにこの3つの名前は明久が考えただらつから、仕方な
いとしても3つとも面白こと思つよ」

蓮夜はまだ教師である自分が口を出す事ではないと笑うが、

「ちょっと、レン兄、僕だから仕方ないってどう言つて事！？」

「……なるほど、幼なじみの久島先生がこいつ言つて事は明久は昔からバカだったと言うことか？」

「雄一！？ どう言つ事だ！？」

明久は蓮夜の言葉に声をあげるが1人の大柄の男子生徒のつぶやきに相手を変えたようで男子生徒を怒鳴りつける。

「あ？ そのままに決つてるだろ。バカ久」

「上等だ。表出る。バカ雄一！？」

明久と『雄一』と呼ばれた男子生徒はにらみ合いを始め出そうとするが、

「ケンカはしない」

「「あだ！？」」

蓮夜は持つていたメモ帳で2人の頭を軽く叩くと、

「レ、レン兄、何するんだよ」

「明久、お前は島田さんと一緒に意見をまとめないといけないんだろ。後は」

「……『坂本雄一』」「

蓮夜は2人の様子にため息を吐くと男子生徒はあまり清涼祭の興味無いのか明久とのにらみ合いを邪魔された事につまらなさそうな表情をして名前を名乗る。

「坂本雄一？……えーと、確か、クラス代表だね」

「ああ」

蓮夜は西村教諭から説明を受けているのか雄一がこのクラスの代表である事を確認すると雄一は小さく頷き、

「そう。とりあえずは落ち着く。今はクラスのみんなに迷惑がかかるから止めなさい」

「……止めるのは今だけなのかよ」

「学生時代の友人とはケンカも必要だからな。いじめや行きましたものじゃない限り、そこまで強くは言わないよ」

蓮夜は明久と雄一に一先ず、ケンカを止めると雄一は蓮夜がケンカ自体は悪い事と思っていないよう眉間にしわを寄せるが蓮夜は気にする事もなく、

「そ、それは放任過ぎないでどうか？」

「でもないと思うよ。ケンカくらいしないと痛さってわからないうだろ。それを知らずに人をナイフで刺しましたとかよりは殴り合いでケンカをした方が清々しい」

瑞希は蓮夜の言葉に苦笑いを浮かべるが蓮夜はケンカはした方が良いと言い切り、

「……おい。明久、久島先生って体育会系か？」

「……うん。高校2年の時にケガで引退するまで勉強なんかしないで本気でマンガで無敵の流派を倒すって言つてた。小学校時代から空手で全国常連」

「……」

雄一は蓮夜の言葉に明久に耳打ちをして蓮夜の過去を聞くと明久から聞かされた事実に顔を引きつらせる。

第6問

「それじゃあ、明久、島田さん、続きを頼むよ」

「はい。アキ、あんたも遊んでないで手伝いなさいよ」

「う、うん」

蓮夜は進行を明久と美波に任せると売上でクラス設備をあげる事もできると言つ話に盛り上がり始め、

(……暴走しているな)

その暴走は蓮夜が教室に来る前に決まりかけていた3つの出し物以外にもあがつて行き、蓮夜はその様子に苦笑いを浮かべると、

「レン兄？」

「静かにしなさい。何のために話し合ひをしていたんですか」

蓮夜は立ち上がり生徒達に落ち着くように言つが静まる事はなく、蓮夜は明久と美波を少し遠ざけ、

「……お前ら、人の話を聞く気はないのか？」

教卓を蹴り飛ばすと教卓は粉々に吹き飛んでしまい、その様子に生徒達は何があつたかわからないようで息を飲むと、

「良いか。島田さんと明久は君達が選んだ実行委員なんだよな。そ

れなのにその2人を無視して騒ぐなんてビリツリツモリだ?」

「「「……」「」」

蓮夜は落ち着いた様子で生徒達に聞くが蓮夜の背後には何か黒いものが見え隠れしており、その様子に生徒達は驚いているのも重なつているせいが蓮夜の問いに誰も答える事はない。

「坂本代表!-!」

「な、なんですか!-?」

蓮夜は生徒達の様子に雄一を呼ぶと雄一は自分が呼ばれるとは全く思つていなかつたようで声を裏返すと、

「……変わりの教卓を取つてきますので、島田さんと明久と一緒にみんなさんの話をまとめておいて下せー」

「お、おひ」

蓮夜は苦笑いを浮かべて教室を開けている間の事を雄一に頼み、雄一は代表としての責務も果たしていない事に怒られると思ったようで蓮夜の口から出た言葉に慌てて返事をし、

「それじゃあ、島田さんも明久もようじー

「は、はー!-?」

「……レン兄、やつすぎだよ」

蓮夜は教室を出て行くと明久と美波は顔を引きつらせて蓮夜の背中を見送る。

「ぐ、久島先生は怒らせると怖いのじやな

「…………意外

蓮夜が教室のドアを閉めると同時に教室の中に漂っていたおかしな緊張感は一気に緩み、一見少女とも間違えそうな少年『木下秀吉』と手に持ったデジカメを整備している小柄な少年『土屋康太』の2人が顔を引きつらせながら蓮夜の幼なじみでもある明久に視線を送るとクラスメート達も同じ事を思つているよつで視線は明久に集中し、

「な、何？」

「明久、お前が知つている久島先生の情報を話せ

明久は集まる視線に声を裏返すと雄二は明久の肩に手を置いて明久が知りうる蓮夜の情報を全て話すよつに言うが、

「な、何を言つてるんだよ。そつ言つるのはレン兄に直接聞くのが普通だろ。ほ、僕の口からなんてひ、卑怯じやないか！…」

「どうか。白状する気はないか？」と言つたが、その反応を見ると面白い事が聞けそうだな

「アキ、何を隠してるの？」

「…………吉井くん、私にもわかるように教えていただけませんか？」

明久は蓮夜の事を話すと自分に都合の悪い事もあるせいか、後ずさりを開始するが瑞希と美波の背後にはなぜか真っ黒な氣配が漂い始め、その様子を見て雄一は楽しそうに笑っている。

第7問

「で、何で、久島先生の話をするのをイヤがるんだ?」

「待て!? 雄二」この状態はおかしいから!? まずは僕の足の上に乗せられているこの石を避けるんだ!?」

明久は対抗虚しくクラスメートに捕まるどどこのから持ち出して来たかわからない石置の上に正座をさせられるだけではなく、彼の足の上には石が積まれている。

「アキ、別におかしな事を聞いているわけじゃないでしょ。話しなさいよ」

「美波、おかしいのは話じやないから、今、僕に起きているこの状況だから!?」

「なら、白状するか? それなら、石は避けてやる」

美波は明久が蓮夜の事を話す事を嫌がっている意味がわからないとため息を吐くが明久にとつては問題はそこではないと叫び、雄二は蓮夜の情報を話すなら助けてやると笑い、雄二の意見に同調するようクラスメート達は大きく頷く。

「……イヤだ」

「ムツツリー!、追加だ」

「…………」
「解

明久は意地でも言いたくないのか視線を逸らすと明久の足の上にはもう一枚石が積み上げられ、明久の悲鳴が教室に響くと、

「吉井くん、そんなに久島先生の事を話したくないなんて、2人だけの秘密だなんて、不潔です！！ 酷いです！！」

「ひ、姫路さん、何を言つてるの？ 僕とレン兄でそんな事あるわけが！？」

「……なら、どうして教えてくれないのか、ウチ達に教えてくれないかな？」

瑞希は何かおかしな方向で蓮夜と明久の関係を考えており、明久が全力で否定しようとした時、美波の手により、明久の足の上の石は3枚になっている。

「……明久、幼なじみと言つのはワシらも知つておるのじや、簡単なプロフィール喰らいでも良いのではないか？ 年齢とか」

「イヤだよ。そんな事を言つても、みんな、根ほり葉ほり聞く気だろ！！ ……せっかく、レン兄が前みたく笑つてくれてゐるのに」

秀吉は明久が意地にならない程度の内容で良いと落とし所を提案するが明久はクラスメート達を信用できないようであり、声を張り上げた後、少しだけ悲しそうに目を伏せると、

「……高校2年の時のケガか？」

「な、何を言つてるんだよ。ほ、僕はそんな事は何も知らないよ」

「……明久、お前、わかりやす過ぎだ」

雄一は少し前に明久から聞いた蓮夜のケガの事をつぶやくと明久はその言葉に慌てはじめ、雄一は大きく肩を落とし、

「それに関しては俺も聞く気はねえよ。流石にお前の様子を見れば深入りしちゃいけない気がするしな。俺はお前を地獄の底に叩き落したいが、今のところは久島先生には何の恨みもねえしな」

「何だと、それはどういつ事だ！！」

雄一は蓮夜のケガの話には触れないと明久の耳元でつぶやくが明久は雄一の言葉に文句があるようで雄一を怒鳴りつける。

「そのままだ。それより、早くしないと久島先生が帰つてくれるぞ。久島先生がこれを見ると……この石も拳で割れるか？」

「さ、流石にそれはないと思うのじゃ

「…………あの様子じゃ否定できない」

雄一は先ほどの蓮夜の様子を思い出して、今の行動が自分達の首を絞めている事だと気づいたようで顔の血の気が引いて行き、クラスメート達も雄一と同じ答えに行きついたようで顔を引きつらせると、

「誰か、久島先生の足止めに走れ！……このままじゃ、明久の足の上に乗つている石のように割られる！……全力で証拠を消せ。島田、時間がない。3つから、多數決で決めるぞ」

「わ、わかつたわ」

雄一は慌ててクラスメートに指示を出し、蓮夜が戻ってくる前に証拠を隠滅するために動き出す。

第8問

「……で、お前達は何がやりたかったんだ?」

「……誰だよ。姫路を足止めに行かせたのは」

蓮夜は教室に戻つてくると明久への尋問をしていると叫つ事實を知つて、いるようで眉間にしわを寄せる雄一は蓮夜の足止めに向かつたのが瑞希だつたため、簡単にばれてしまつたようで大きく肩を落とす。

「す、すいません。吉井くんと久島先生がとつても仲が良さそうでしたので気になってしまいまして」

「すまぬのじや。先ほどの久島先生の自己紹介では明久と久島先生が幼なじみと言つ事しかわからなかつたのじや、それで……」

蓮夜が立腹の様子に瑞希と秀吉は慌てて蓮夜に頭を下げるが他の生徒に反省している様子は見えず、

「……だからと言つてもこの拷問と言つ手段はないだろ。だいたい、こんな拷問器具をどこから持つてきたんだ?」

「や、そりだよ。どうして、僕が拷問を受けないといけないんだよ」

蓮夜は怒りを通り越して呆れていようであり、大きくため息を吐くと明久は拷問を受ける理由はないと叫ぶ。

「それはアキが何かを隠そりとするからでしょ」

「……島田さん、その前に人の秘密を詐索すると云つ非常識な行動を恥じなさい」

「は、はい。反省します」

美波は明久に責任転嫁をしようとすると蓮夜は大きくなため息を吐き、

「だいたい、俺の事を聞きたいなら、本人に聞きにくるのが礼儀だ。それは周りに不信感を与える事にもなります。今は学生でノリでやつているのかも知れませんが社会に出た後に苦労する事になります。止めなさい。後は坂本代表」

「な、なんですか？」

「君は代表としてクラスをまとめないといけない身ですよ。それが率先するのはどうなんですか？」

蓮夜は雄一を見て雄一に代表としての行動ではないと言つが、

「知らねえよ。俺は明久が地獄に落ちる！？」

「他人の不幸を願うなら、それ相応の不幸が自分にも降りかかると思つよつに」

「雄一」と明久の関係は友人と言うには微妙であり、雄一は明久の事などどうなつても良いと言いかけると蓮夜からはチョークが雄一に向かって投げられると同時に雄一の頬に何かがかすつた感触と後方の壁に何かが当たったような大きな音がし、生徒達が壁の方を振り返

ると壁に小さく焦げたような跡と一粒の欠片すら残す事なく粉々になつてゐるチョークだつたものが畳の上に落ちてゐる。

「な、何だ！？ 今のは！？」

「ただのチョーク投げです。教師とはチョークを投げるものです」

「た、ただのチョーク投げじゃねえよ！？ 威力がおかしいだろ」

チョークがかすつた雄二の頬は小さな擦り傷が付き、血がうつすらと滲みだし、自分に何があつたかわからないようで声を張り上げるが蓮夜は騒ぐ事ではないと言い切り、雄二は本来あり得ないチョーク投げの威力に立ちあがり声をあげて叫ぶと、

「坂本代表、あまり、うるさいと次は本気で額を狙つて投げます」

「……」

蓮夜はこれ以上の威力があると伝えると雄二は身の危険を感じたようで顔を引きつらせて黙り込み、静かに自分の机がわりのミカン箱の後ろに正座をするとクラスメート達も今の蓮夜に逆らつてはいけないと思つたようで静かに席に座る。

第9問

「……レン兄が居れば、僕はFクラスを我がものに

「明久、おかしな事を考えるなよ。あくまで、今回は周りに問題があつたからであつて、昔から言つてるが、俺はお前の肩を持つだけじゃないからな」

「わ、わかつてるよ。当然じゃないか！？」

明久は蓮夜が居れば自分はFクラスではやりたい放題だと考えたようで小さく笑みを浮かべるが蓮夜は明久の考えている事が手に取るようにわかるようだため息を吐くと明久は慌てて否定するが、

「……明久」

「すいませんでした！？　おかしな事を考えました！？」

蓮夜は明久の名前を呼ぶと明久は畳の上で土下座をして蓮夜に謝り、

「まったく、それで、坂本代表、島田さん、明久、清涼祭の出し物は決まったのか？」

「は、はい。あのままではまともないと思つたんで、最初の3つから多数決を取つて」

「中華喫茶『ヨーロピアン』か？　……名前は考え直そつな。周りにバカだと思われるから」

蓮夜は清涼祭の出し物はどうなったかと聞くと美波は多数決を取った事を蓮夜に説明し、蓮夜は黒板に書かれた正の字が多い『中華喫茶』を見て名前の変更をするように指示を出す。

「ちょっと、レン兄、バカだと思われるってどうした事だよー!?」

「明久、お前のせいでクラス全体がバカだと思われたらみんながかわいそうだろ」

「何を言つてるんだよー!! このクラスは姫路さん以外、みんなバカだよー!!」

明久は自分が決めた名前では良くないと蓮夜が言うため、声を張り上げるが蓮夜はため息を吐くと明久はこのクラス自体が瑞希を抜かしてバカだと言い切り、

「……あのなあ。俺が言つのもなんだけどな。明久、お前と同程度のバカはこの世に存在しないんだ。お前が誰かを『バカ』だと言つのは世の中の人すべてに失礼だ。みんなに謝りなさい」

「流石、幼なじみだ。明久のバカを理解してる」

蓮夜は明久の言葉はクラスメート達に失礼だと彼の肩に手を置いて言うと雄二は楽しそうに笑い、

「僕をもつと信じてよー?」

「明久、俺はちゃんとお前を信じてる。どうせ、1人暮らしを始めてから、ゲームやマンガに仕送りを使い込んでまともな生活もしないって、成績だけじゃないんだ。お前のバカさは魂に刻まれたも

のだから

明久は蓮夜の言葉に声をあげるが蓮夜は首を横に振つて明久に『事実』を伝えようとする姿に、

「……本当に久島先生は明久と会つのは7年ぶりなのかのう」

「……明久の行動パターンを読みきつてる」

「す、凄いです。いつか、私も吉井くんの行動がすべて読み切れるようになりたいです」

蓮夜と明久が本当に幼なじみだと生徒達は理解したようで大きく頷き、

「みんなもその反応は酷いよー…？」

「明久、現実から逃げてはいけないぞ。それにお前は清涼祭の実行委員だろ」

明久は泣きながら教室を出て行こうとするが蓮夜は明久の首をつかみ、明久を止めると、

「それじゃあ、喫茶店の名前は後で考えるとして、簡単な役割分担を決めよつか？ 島田さんと坂本代表も前に出てきてまとめてくれ」

「はい」

「俺もか？……面倒だな」

実行委員の明久と美波だけではなく、代表である雄一にも指示を出
すが雄一はあまり清涼祭に興味がないように見える。

第10問

「ん？ 坂本代表はあまり、学園祭に興味がないみたいだな」

「ああ。正直、興味がない。面倒だから、島田と明久に実行委員を押し付けたわけだしな」

蓮夜は雄一の様子に苦笑いを浮かべると雄一は蓮夜の様子から本音を言つても良いこといろいろだと思ったのか面倒だと言い切り、

「そりか、まあ、やる気がなくてもやつて貰わないと困るんだけどな。思いだしたんだけど、君つて昔は神童つて言われていた坂本雄一だる。今はすいぶんとやる気をなくしているみたいだけど、君が中心になつてくれれば、西村先生が言つていた設備上昇も簡単だろ？ それともそれくらいもできないで神童つて言われてたのかい？」

「ああ。当然だ。やつてやる「じやねえか」

蓮夜は雄一の名前に昔、聞いた噂を思い出して雄一の事を挑発すると雄一は蓮夜の挑発にプライドをくすぐられたのか口元を緩ませると次々とクラスの役割分担を決めて行き、先ほどまでの停滞していたのが嘘のように出し物の名前以外は決まってしまう。

「それじゃあ。後10分は自習時間にしましちゃうか

「その前に、久島先生に聞きたい事があるんですけど、もう少しこ、良いよな？」

蓮夜は早く話し合ひが終わった事に残りを自習時間にしようつと書つ

が雄一は挑発された事の仕返しと蓮夜の情報を聞き出したいようでニヤリと笑うと、

「別にかまわない。名前は言つ必要はないな。年は24、血液型はA。身長体重は必要ないとして3サイズは必要か？」

「……レン兄、3サイズは聞いても嬉しくないから」

「そりか？『玲』なら、必須だと詰め寄つてくるぞ」

「玲？ その人って久島先生の彼女ですか？」

蓮夜は冗談交じりで自分のプロフィールを話し始めると明久は蓮夜の言葉にため息を吐くが蓮夜は明久の様子を見て苦笑いを浮かべて『玲』と言う名前を出すと瑞希は蓮夜の彼女だと思ったようで遠慮がちに聞くなか、男子生徒達は蓮夜に向けて殺意を上げ始めるが、

「や、止めてよ。姫路さん、おかしな事を言わないで！？ 姉さんとレン兄がそんな関係になつたら、僕はレン兄の幸せを考えて猛反対をするよーー！」

「姉さん？ アキ、あんたにお姉さんついていたの？」

明久は自分の姉であり、蓮夜の幼なじみの『吉井玲』を思い出した上で全力で蓮夜と玲の関係を彼女なんかではないと否定し、Fクラスの生徒は誰も明久に姉がいると言う事を知らなかつたようで首を傾げる。

「明久、お前、玲の存在を隠してたのか？」

「そ、そりや、うだよ。あんな、姉さんがいるなんて知られたら、僕は恥ずかしそぎて生きていけないよー！」

「……明久、いくらなんでも言いすぎだろ」

蓮夜は明久が玲の事を隠しておきたい理由も何となくわかるようで苦笑いを浮かべるが明久の玲へ対する考えは蓮夜の想像をはるかに超えており、蓮夜は大きくため息を吐くと、

「そうすると、久島先生は明久の幼なじみではなく、明久の姉上の幼なじみとなるのじやな」

「まあ、そう言つ事だ。玲が明久にいたずらをして泣いた明久が良く家に逃げ込んできていたぞ」

「……明久、お前の姉つて何なんだ？」

「……言わないでよ。泣きたくなつてくるから」

生徒達は蓮夜と明久の関係より、明久の姉である玲の方に興味が移り始めた時、授業終了の鐘が鳴り響き、

「それじゃあ、今日はここまでだな。帰りのH.R.は西村先生が出るのか、ちょっとと確認をしてくるから、待機しているよつに

蓮夜は一度、教室を出て行く。

第11問

「それじゃあ、西村先生、お願ひします」

「ああ」

蓮夜は西村教諭にFクラスのHRを任せると職員室に振り分けられた自分の机に荷物を降ろすと、

(……明久を痛めつけるためにあれだけ協力するんだからな。上手く道筋を立てれば良いクラスになると思つんだけどな)

Fクラスを見て感じた事を思い浮かべて苦笑いを浮かべた時、

「久島先生、Fクラスの生徒はどうでしたか?」

蓮夜の様子を見た福原教諭が蓮夜に声をかける。

「福原先生、それがなかなか……昔を思い出しますね」

「久島先生も元気でしたからね」

「いや、元気と言つた……俺は巻き込まれていたと言つのが眞実と言つた……ケガで自棄になつていたのも否定できないと言つた」

「それなら、どうして、視線をそらすんですか? 本当は好きでやつてましたよね?」

蓮夜は苦笑いを浮かべて学生時代を思い出すと言つと福原教諭は学

生時代の蓮夜を思い出したようで昔を懐かしむように笑うと蓮夜は友人達に巻き込まれただけだと言うが自分にも後ろめたい事がある。ついで福原教諭から視線を逸らした時、

「ん？ 福原先生は久島先生の事を知っているのですか？」

「はい。久島先生が高校生の時に日本史の授業を受け持っていましたよ。彼も今は落ち着いていますが昔はかなり元気で。屋上からグラウンドまでワイヤーで降りてみたり、巨大な落とし穴を作つて、いじめをしていた生徒を埋めてみたり、学園祭で無許可で花火を打ち上げてみたり、カツラと噂されていた校長の頭が本物か偽物か確認したりと他にもいろいろと」

「……久島先生」

「わ、若かったんですね。もう、そんな事はしません……」

西村教諭は簡単にHRを切り上げてきたようで話していた2人に声をかけると福原教諭は蓮夜が高校時代に行つた騒ぎを話しだし、西村教諭は福原教諭から聞かされる蓮夜の高校時代の出来事に眉間にびくびくと青筋が浮かびだすと蓮夜は若さゆえの過ちだと全力で弁明を始め、

「……当然です。おかしな行動は控えてください。あのバカどもがマネをしそうですから、教師としての自覚を持つてお願ひします」

「いや、流石に人に拷問にかけるような危ない事は……してたけど」

「……久島先生、あなたは何をしていたんですか？」

西村教諭は蓮夜に教師としての自覚を持つように言うと蓮夜はFクラスの生徒が明久にしていた拷問に何かが引っかかったようで小さな声でつぶやき、その声は西村教諭の耳に届いたようで西村教諭は大きなため息を吐く。

「流石に『冗談です。それより、西村先生、福原先生、授業の事なんですけど、俺は西村教諭の補佐と言う形になるらしいので、今のFクラスの状況をできれば個人での成績を教えてください。個人毎の学習計画も立てて見たいので、福原先生にもご指導をお願いしたいんですが」

「わかつてますよ。私が協力できる事は何でも言つてください」

「そうか。それなら、私の机に来てくれ

「はい」

蓮夜は苦笑いを浮かべながら「冗談だと笑い、彼なりのFクラスの教育計画を立てたいようで西村教諭と福原教諭にFクラスの成績を教えて欲しいと頭を下げるとき西村教諭は蓮夜が気に入ったようで、蓮夜についてくるように言つと、

「久島くんも立派な先生ですね」

福原教諭は教え子である蓮夜の成長が嬉しいようで西村教諭に授業のアドバイス受けている蓮夜の姿を見て優しい笑みを浮かべる。

第1-2問

「……で、2人は何をしたかったわけだ?」

「「……」

蓮夜が職員室でしばらく、西村教諭のアドバイスを受けていると明久と雄一がまた騒ぎを起こしたと言う話になり、蓮夜は西村教諭の補佐で2人の捕縛に動きき、雄一は蓮夜から視線を逸らすがすでに明久は蓮夜の前で土下座をしている。

「明久、顔をあげる。お前達は目的があつて『女子更衣室』に忍び込んだんだろ。話は聞く、それで納得がいかなかつたら、根性を叩き直すだけだ。俺は玲と違つておかしな事はしない」

「……怒らない?」

「話を聞いてから考える。後は話をする時はきちんと相手の目を見る」

蓮夜は話をするために明久に頭をあげるようになると明久は蓮夜から目を逸らすため、蓮夜は明久に状況をしつかりと話すようになり、が、

「……久島先生、吉井と坂本を捕まえたのは確かにありがたいんだが、屋上から、ワイヤーで降りての奇襲はどうかと思うんだ」

「……俺もそう思つ」

蓮夜が2人を捕まるに至った過程には問題があつたようで同席していた西村教諭と捕まつた人間である雄一は眉間にしわを寄せる。

「いや、ちょっと、昔の血が騒ぎまして」

「……明久、お前の兄貴は何をしてたんだ?」

「い、いや、僕はあまりおかしな事をしてたとは聞いた事がなかつたんだけど」

蓮夜は苦笑いを浮かべると雄一は明久に蓮夜の過去を聞くが明久も知らない蓮夜の一面だったようで首を横に振ると、

『西村先生、Fクラスの須川と横溝が!…』

「……今度はそっちか、久島先生、ここは任せても良いでしょ?」

「はい。わかりました」

他にもFクラスの生徒が問題を起こしたようで西村教諭は明久が蓮夜に頭が上がらないのを理解したようで蓮夜に2人をさせて生徒指導室を出て行くが、

「……今更だけど、俺、今日は初日なんだけど、こんな事をして良いのか?」

「本当に今更だな」

蓮夜は西村教諭を見送った後に自分に明久や雄一を処罰できるのか

と首をかしげ、雄一はため息を吐く。

「まあ、状況を確認してからだな。この学園はあまり停学とか直接的な処罰は嫌いみたいだしな」

「そうなの？」

「実際、最初の試召戦争の話も聞かせて貰うと実行犯はDクラスだとしても脅迫をしてるわけだからな。周りが納得がしているとは言つても、何もおどがめなしは本来はあり得ない。お前らはバカをやるのも良いけど、もう少し、西村先生や先生達に感謝をしなさい」

蓮夜は西村教諭からのアドバイスで文月学園の特性を理解しているようで苦笑いを浮かべると2人も昔の自分と同じように直ぐには理解できないがいつか西村教諭達の思いも理解出来ると思ったようだが、

「何で、鉄人なんかに」

「明久」

「う。わかったよ。感謝できるような事があつたらね。と言つ事で、雄一、帰ろうか？」

「そうだな」

明久はまだ蓮夜の言いたい事が理解できないようであり、とりあえず、話を切ると誤魔化して逃げようとする。

「それじゃあ、とりあえず、どう言つ状況で女子更衣室に忍び込む

事になつたか説明して貰おうか？ 逃げよつとしたのは罰を「えな
いといけないから、一先ず、正座で良いぞ」

しかし、蓮夜からは逃げきる事はできず、明久と雄一は床に正座を
させられる事になる。

第1-3問

「……なるほど、明久らしいと言えばらしいんだが」

「な、何？」

「……常識で男子生徒が女子更衣室で待ち伏せをするな。そして、逃げ込むな」

蓮夜は明久と雄一から瑞希が転校してしまったかも知れなく、それを防ぐために雄一に協力を仰ごうとした途中で雄一の行動を読んで女子更衣室に入つた事、雄一は幼なじみの少女『霧島翔子』から逃げていた途中で女子更衣室に隠れた事、2つの理由を聞いてため息を吐く。

「で、でも、そうでもしないと雄一を捕まえられないわけだし」

「……久島先生は翔子を何もわかつていいないんだ。あいつに常識は通用しない」

蓮夜がため息を吐く様子に明久はバツが悪そうな表情をする隣で、雄一は眉間にしわを寄せて常識から外れないと翔子からは逃げきれないと言つが、

「坂本代表、1つ聞いても良いか？」

「お、おひ」

「逃げるから、追いかけられたんじゃないのか？」

蓮夜はもう一度、ため息を吐くと雄一が逃げる事に原因があると言
い切る。

「待て。普通に考える。逃げるだら」

「なぜだ？ 幼なじみが一緒に帰らうと言つてきただけだろ。用事
もないなら、一緒に帰るだけで良いわけだろ」

「そんな常識で翔子を測るな！－」

蓮夜は一緒に帰つてやるくらいしてやれば良いと雄一の行動に呆れ
たようだが雄一から見ると一緒に帰る事自体が危険な行為でしかな
いよつて声を張り上げるが、

「坂本代表、良いか。常識外れな幼なじみが自分にしかいないと思
つたら大間違いだ」

「……そうだね」

「おい。明久も久島先生もなんで俺から目を逸らすんだ」

蓮夜と明久は常識で測り知れない幼なじみを持つているのは雄一だ
けではないと言い、雄一は2人の反応に意味がわからないようで眉
間にしわを寄せると、

「坂本代表が霧島さんから距離を取ろうとする理由もわかるが、坂
本代表が割り切つていないので拒絶をするのは間違っていると思う
けどな」

「な、何を言つてるんだ！？」

「レン兄、雄一、どうかしたの？」

蓮夜は雄一が翔子への恋愛感情を押し込めようとしている事に気づいたようでくすりと笑うと雄一は見透かされた気分になつたようで声を張り上げるが明久は意味がわからぬようで首をかしげる。

「まあ、明久は気にしなくて良い。玲の弟だけあつて鈍さも常識外れだから、同年代の恋愛感は理解できないし、仮に理解できても理解に達するまでの知能がないから説明するだけ無駄だしな」

「ちょっと待つて！？ 明らかに罵倒が混じつてるよね！？」

「明久、よくバカにされてるつて気づいたな。それに気づけるようになつただけ賢くなつたと言つ！」とか

「レン兄、頭を撫でないで！？」

蓮夜は明久には雄一の翔子への想いを理解できないから気にする必要はない事を伝えるが明久はその言葉に声を上げ、蓮夜は明久の反応に少し驚いたような表情をした後、彼の頭を撫で、

「……明久と久島先生の関係が良くわからぬんだが」

雄一は目の前で繰り広げられるコントのような幼なじみのやり取りに頭がついて行かないようで眉間にしわを寄せた。

第14問

「まあ、とりあえずは2人とも眞面目に清涼祭の準備に参加する事、姫路さんの体調を考えると設備向上は必須なんだ。売上を上げる事」

「だけど、設備の向上はまだしも姫路の転校の問題点は3つだろ」

蓮夜は明久と雄二に罰として清涼祭の準備に力を入れる事を言い渡すが雄二は何か考えているよう眉間にしわを寄せると、

「そうなの？」

「なるほど、元神童は伊達じゃないか」

雄二の様子に明久は首をかしげ、雄二が考えている事に蓮夜も気づいているように苦笑いを浮かべる。

「レン兄、雄二、どう言つ事？」

「設備向上は必須、だけど、それ以上に姫路さんの体調を考えると旧校舎の老朽化が酷いって事だ」

「後はクラスメートの成績、姫路の両親はレベルの低いクラスメート達ばかりじや成績の向上も考えられないだろ」

明久は残り2つの理由を教えて欲しいと言つと蓮夜と雄二は『設備』、『学習環境』、『クラスメート』だと話す、

「参ったね。問題だらけだ」

「さつ田は姫路と島田が召喚大会で活躍すればさうにかかるだろ。設備は売上しだい」

明久はどうしたら良いのかわからないようで胸の前で手を組み、首を傾げると雄一はさつまどうにかなりそうだが、

「学園環境か……普通に考えると学園がどうにかしないといけないレベルの問題だからな」

「そう言つ事だ」

旧校舎の老朽化だけは生徒ではさつまつもできないため、蓮夜と雄一は頭をかく。

「レン兄、雄一、どうにかできないの？」

「とりあえずは学園長に話してみる必要があるな。それじゃあ、行くか？」

「行くつて学園長室にか？」

蓮夜は学園長に話を聞いて貰う必要性があるため、2人を学園長に会わせようとするが雄一は簡単に学園長があつてくれるとは思つていないので首を傾げると、

「学生2人じや門前払いもあり得るだろ。それに俺は学園長室に顔を出すようにも言われてるからな。まあ、俺は新任の臨職、たいした力になれないかもしねんだけどな」

「それでも充分だよ」

「ああ。それより、大丈夫なのか。久島先生」

「何がだ？」

蓮夜は自分ではたいした力添えはできないと思つてくれと苦笑いを浮かべる姿に雄一は何かあるのか蓮夜の名前を呼ぶ。

「俺達は学園に文句を付けようとしてるわけだぞ。臨時職員の久島先生は学園長に目を付けられないか？ 下手したら初日でクビとかないとも言えないだろ？」

「ちよ、ちよと、レン兄、大丈夫なの！？」

「雄一は蓮夜に立場的に大丈夫なのかと聞くと明久は事の重大さに気づいたようで蓮夜に詰めより、

「まあ、大丈夫だろ。いきなりクビは契約を交わしてるし……大丈夫だと思いたい」

「ちょっと、それ、明らかに大事だからね！？ どうするのさ。その年で無職とか！？」

「大丈夫だ。しばらくは食えるくらいの蓄えくらいはあるから

「なら、どうして田を逸らすのさ！？」

蓮夜は心配ないと笑うが明久は蓮夜の事が心配なようであり、声を張り上げると、

「俺は臨時でも新任でも教師なんだ。なら、やる事は決まってるだろ。生徒の事を考えて動くのが教師、それだけだ。俺の事は良いから、行くぞ。教室でお前らを待ってる仲間もいるんだろ。お前らはその道筋を立てないといけないんだからな。ほら、2人とも行くぞ」

「明久、行くぞ。どうなるかわかんない事なら、ここで悩んで立て仕方ねえ」

蓮夜はそれが教師だと笑い、雄一は蓮夜の言葉にやりにいくと思つているのか頭をかきながら立ち上ると3人で学園長室に向かって歩き出す。

第15問

「誰だい？」

「久島です」

「悪いね。少し待つてくれるかい」

3人は学園長室の前に着き、ドアをノックすると学園長からは少し待つように指示があり、しばらく待つていると、

「……それでは失礼させていただきます」

学園長室では学園長と『竹原教頭』が話をしていたようで竹原教頭がドアを開けて学園長室からでてくる。

「……君が新任の久島先生か？ 私は教頭の竹原です」

「はい。挨拶が遅れて申し訳ありません」

竹原教頭は蓮夜を見るなり、彼の性格なのか蓮夜を『臨時職員』と見下したような目で見るが蓮夜はその視線を気にする事なく頭を下げると、竹原教頭は後ろにいた明久と雄一には何かを言つ事なく歩いて行つてしまつ。

「レン兄……何か、竹原先生、感じ悪くない？」

「ああ。俺達を完全に見下したような顔をしてやがった」

「まあ、プライドが高そつだしな。あんなもんだろ」

明久と雄一は竹原教頭の態度が気に入らないようだが蓮夜は臨時職員で渡り歩いてきているため、気にした様子もなく、

「久島先生、待たせて悪かつたね。入つてきな」

「はい。失礼します。明久、坂本代表も行くぞ」

学園長から入室の許可が出たため、蓮夜は2人に声をかけて学園長室に入ると、

「久島先生、後ろの2人は何だい?」

「すいません。ウチのクラスの坂本代表と吉井明久なんですが、学園長先生に直談判したい事があるとの事でしたので」

「……学生風情が直談判ね」

蓮夜は学園長に頭を下げた後、明久と雄一が学園長に話したい事を伝え、学園長は少し考え込むような素振りをする。

「レン兄、大丈夫なの?」

「明久、ちょっと静かにしている」

明久は学園長の様子に蓮夜の腕を小突くが蓮夜は明久に静かにするように言い、

「まあ、話くらいは聞いてやっても良いけど、初日から2年の問題

児を2人、学園長室まで連れてくるなんて、久島先生、あんたは覚悟ができているんだうつね？」

「覚悟？ する必要がありますか？ 私は福原先生と高橋先生から学園長先生は教師も能力主義だと聞かされました。この程度でクビにされないとは思っていますが」

「……なるほど、食えない男さね」

学園長は蓮夜を齧るような視線を向けるが蓮夜はにっこりと笑い、学園長はそんな事はしないと言つ様子に学園長は口元を緩ませ、「やはりども、少し待つてな。先に久島先生との少し話があるからね」

「……わかりました」

学園長は蓮夜との話を先に終わらせるため、明久と雄一に待つているように言い、2人は領くと学園室中央にある来客用のソファーアーに学園長に許可を得る事なく座り、

「……へやじりども、あんたらに常識はないのかい？」

「……2人とも、せめて許可を得てから、座つてくれ」

蓮夜と学園長は2人の行動に大きく肩を落とすが、

「え？ だつて、立つて待つてるのは疲れるよ」

「これくらいは良いだろ。別に減るものでもないんだし」

明久も雄一も自分達の行動が常識だと思っているのか気にする様子はなく、

「……久島先生、悪いね。先にこのへんじやつじの話を終わらせるとよ」

「……すいません。学園長先生」

学園長は2人の態度に先に終わらせてしまおうと思ったようである。

第16問

「却下だね」

雄一が学園長に旧校舎の改修工事を頼むと学園長は少し考えるような素振りをした後に2人の直談判を跳ね返す。

「雄一、このばあをコンクリに詰めて捨ててこよ」

「……明久、もう少し態度には気を使え。まったく、このバカが失礼しました。どうか、理由をお聞かせ願えますか？ ばあ」

「まったくですね。ばあ！？ レ、レン兄！？ 何をするんだよ

明久と雄一は納得がいかないようで学園長に理由を話すよつに詰め寄るがその態度は目上の人間に物を尋ねる態度ではなく、蓮夜は2人の頭をメモ帳で叩くと学園長室には小気味の良い音が2度、響き、「……中身が入っていないから、良い音がするな

「まつたくさね」

蓮夜は頭を押さえる明久と雄一を気にする事なく、2人の頭には中身が詰まつていないと言い切ると学園長は蓮夜の言葉に苦笑いを浮かべる。

「何すんだよ？」

「坂本代表、明久、納得がいかないのかもしれないけどな。それは

田上の人間に物を尋ねる態度ではない

「雄一は蓮夜を睨みつけるが蓮夜はため息混じりの言葉で2人の態度は良くないともう一度、言い聞かせると、

「学園長先生、理由をお聞かせ願いますか？2人も納得していないうえでし、それにFクラスには1人身体の弱い生徒がいまして彼女の体調を考えてしまうと」

「身体が弱い生徒？……ああ。姫路瑞希だつたかい？」

「そうです。お願ひです。このままの設備だと姫路さんが転校するかもしだれ！？レン兄、ポンポン、頭を叩かないでよ！？」

蓮夜は2人が設備向上を願い出た理由を補足すると学園長は瑞希に心当たりがあるようで考えるような素振りをし、その様子に明久はまくしたてるように話しだそうとするが蓮夜は明久の頭をもう一度、メモ帳で叩く。

「本当に良い音がするな」

「だひ」

「ちょっと、レン兄、雄一、それはなんなのさ……」

明久の頭を叩いた時に響いた音に雄一は明久をからかう事に全力を尽くすように切り替えたのか真剣な表情をすると蓮夜は苦笑いを浮かべて答え、明久は2人の反応が不満だと声をあげるが、

「学園長先生も知つての通り、彼女は現在の総合得点は学年で2番

と優秀な生徒ですが身体が弱く、彼女の両親は彼女を心配して転校も視野に入れているそうです」

「やれやれ、久島先生、あんた、本当に食えない男だねえ。生徒の前で良く次から次と学園長であるあたしを『齎して』くるね」

「学園長先生、何を言つてはいるんですか？ その生徒が転校を望んでいないんです。教師として生徒の力になるのは当たり前ですよ」

蓮夜は学園長に瑞希の優秀さを話し始めると学園長は彼女を引き留めるメリットをはじき出したようで蓮夜の言葉に少しだけ表情を緩ませ、蓮夜をからかおうとするが蓮夜はにこりと笑い、教師として当然の事をしていると返し、

「……雄一、レン兄どばばあは何を話してゐの？」

「……久島先生、侮れねえじゃねえかよ」

明久は蓮夜が押し気味に話しかけている様子を理解していないようで首を傾げる隣りで雄一はいつの間にか学園長を巻き込んでいる蓮夜の様子に面白いつと思つたのか小さく口元を緩ませる。

第17問

「まあ、確かに優秀な生徒が他の学校に流出のは避けたいね。だからと言つて簡単に頷くわけにもいかないね。設備に差を付けるのは文用学園の方針であり、これはスポンサーにも了承を得ている事さ。それを覆すんだ。それに見合つた結果がないとできないね」

「見合つた結果ですか？」

学園長は何か考えがあるようで条件をつけたいようであり、蓮夜は首を傾げると、

「そこのがくじやり、2人、話を聞きな。改修の話は前向きに検討してやるよ。その代わりと言つてはなんだけどね。あたしのお願いを2人に聞いて貰おうかね」

「わかつた。明久を好きにして良いぞ」

「……誰もそんな頭の悪そうな不細工なくそじやりを貰つたつて嬉しいなさね」

学園長は交換条件を明久と雄一に話そつとすると雄一はおかしな事を考えたようで明久を売り渡そうとするが学園長は明久を直ぐに却下し、

「いやちだつて、お前みたいなばばあ、お断りだ！――」

「……明久、坂本代表、頼むから話を聞くつて事を覚えてくれ。話をまつたく進まないから

明久は学園長に向かい叫び、蓮夜は大きくため息を吐く。

「それで、ばばあ。明久の身体が目的じゃないなら、何が目的だ？
悪いが、俺はばばあみたいなのはお断りだぞ」

「あたしだって、あんたみたいなくそじゅりはお断りだよ。それに
あたしには旦那がいるしね」

「「ばばあ、嘘を吐くな！…」」

雄一は明久がダメなら自分の身体が目的かと言い始め、学園長を拒
絶するが学園長は話が進まない事に大きく眉間にしわを寄せて2人
が目的ではないと言い切るがその言葉を明久と雄一は信じられない
よつで大声で叫び、

「……本当に失礼なくそじゅりどもだね。あんた達は本当に設備を
上昇させる気はあるのかい？」

「学園長先生、本当に申し訳ありません」

学園長は呆れているよつであり、蓮夜は学生2人の態度に申し訳な
れやうに学園長に頭を下げ、

「それで、あんた達は話を聞く気はあるのかい？ ないなら、この
話はなかつた事にするよ」

「聞く、聞きます」

「もつたいぶつてないでさつさと！？ ほんほん、ほんほんと頭を

叩くんじゃねえよーー！」

「だから、田上の人に対する言葉づかいには気をつけろ」

学園長は明久と雄一に話を聞くつもりはあるのかと確認すると明久は直ぐに返事をするが雄一は態度が大きく、蓮夜にメモ帳で頭を叩かれる。

「まったく、久島先生も初日からこんなくそじやうどもの相手をするのは大変だね」

「まあ、でも、学生は元気なのが一番ですから、勉強ばかりで下を向いているよりは良いと思いますけど」

学園長は蓮夜の様子に苦笑いを浮かべると蓮夜は苦笑いを浮かべて返事をし、

「学園長先生、すいませんが条件をお願いします。明久、坂本代表も話を聞く

「う、うん」

「ああ」

蓮夜はもう一度、学園長に頭を下げると明久と雄一に遊んでないで話を聞くように言い、

「それじゃあ、始めようかね。あんた達は清涼祭で行われる召喚大会を知っているかい？」

学園長は一度、頷くと明久と雄一に清涼祭で行われる召喚大会の事を聞く。

第18問

「ああ。ウチのクラスにも参加者はいるからな」

「ううかい。それなら、話が早いね。その優勝者に与えられる賞品の一つに如月ハイランドのプレミアムオープンのペアチケットにちよつとおかしな噂があるんだけど、あんた達にそのチケットを回収して貰いたいのさ」

雄一は瑞希と美波が参加するため、召喚大会の事くらいは知つていると頷くと学園長は明久と雄一に召喚大会で優勝するように提案するが、

「ペアチケットだと？」

「坂本代表、どうかしたのか？」

雄一は学園長の提案に何かあるのか顔が血の気が引いて行き真っ青になりだし、蓮夜は雄一の顔を覗き込む。

「ば……学園長、ペアチケットの回収つて言つたぞ」

「ああ。最初に言つておくよ。優勝者に譲つてもうつとかは却下だよ。あんた達2人で優勝するんだ。もちろん、強奪も却下だよ」

「……ちつ」

明久は気にする事なく学園長にチケットの回収が目的なら召喚大会に優勝する必要はないと言おうとするが学園長は直ぐに否定し、明

久は舌打ちをするが、

「学園長先生、先ほど、おかしな噂があるとも言つていきましたが、おかしな噂と言つのは」

「ああ。 そうだね。 プレオープンのチケットには如月グループがウエディング体験と言つものを考えているらしくてね」

「ウエディング体験だと？」

蓮夜は雄一の様子も気になるがそれ以上にペアチケットにある噂を聞くと学園長は『ウエディング体験』と言つイベントがあると話し始めるがその言葉に雄一の顔はさらに血の気が引いて行き、

「体験ですよね。 それがおかしな噂につながるとは思えないんですけど」

「普通はね。 だけど、ウチは試験校と言つたで世界中から注目を受けている学校だよ。 そして、如月ハイランドは遊園地の他に」

「……結婚式にも力を入れたいってわけですか？ だとしても無理やり過ぎますね」

蓮夜はあまりおかしな噂は無さそうだと首を傾げるが学園長は補足をして行き、その途中で蓮夜は如月グループの思惑が理解出来たようで大きく肩を落とすと、

「レン兄、何があるの？」

「そのチケットを使って入場すると如月グループが結婚、幸せな家

「庭生活をプロデュースしてくれるみたいだ」

明久は話が理解できないようで蓮夜に聞き、蓮夜は企業が考える手段ではないと言いたげに大きなため息を吐き、

「そんなものを賞品にしないでください」

「悪いね。もう無理なのさ。竹原が決めた事とは言え、如月グループは大口スポンサーだから、へそを曲げられても困るしね。結局は生徒達の問題だから目をつぶろうかとも思つたんだけど、この間、ラブレター一つでバカ騒ぎをした奴らもいるだろ。優勝した人間を襲つて無理やり、チケットを奪つて如月ハイランドに拉致、ウェディング体験、結婚じや、生徒がかわいそうだしね」

蓮夜はそんな噂のある怪しいものなら賞品から外す事も視野に入れて欲しいと言つが学園長は首を横に振り、

「それにあんた達Fクラスが召喚大会で優勝できればスポンサー達にも設備の改修工事は話も進めやすいしね」

「だけど、正直、僕と雄一じゃ」

「やつてやる。ばあ、その代わり、今のまじや、優勝なんて無理だ。俺にいくつか条件を出せ」

学園長は明久と雄一が優勝すれば旧校舎の改修工事はスポンサーからの承諾も考えやすいと話すが明久は優勝できるはずはないと思いつ笑いを浮かべた時、雄一は鬼気迫る表情で学園長の提案を受けると叫ぶ。

第19問

「条件？ 何だい？ 点数操作とかは却下だからね

「……ひつ

「坂本代表、舌打ちは止めなさい」

学園長は雄一の様子に点数操作は問題外だとため息を吐き、雄一は少しは期待していたのか舌打ちをする姿に蓮夜は大きく肩を落とし、

「冗談だ。まあ、多少は期待したけどな

「それで条件つてのは何だい？ 無茶なものは聞けないよ」

雄一はまた蓮夜に頭を叩かれたと思ったのか、1歩引いて苦笑いを浮かべると学園長は改めて雄一に向き合つ。

「条件は2つ。出場者のトーナメント表をいじらせろ。後は対戦科目を俺に決めさせる事」

「……それくらいなら聞いてやつても良いね。わかったよ。それじゃあ、話はこれで終わりだよ。あたしは忙しいんだ。さつさと消えな。ぐそじやりども」

雄一が出した条件を聞いた学園長は条件を飲むと直ぐに明久と雄一を追い出そうとして、

「……学園長先生、教師は生徒の手本にならなければいけないんで

すから、もう少し言葉づかいを気を付けて頂きたいのですが

「悪いね。あたしは学園長って言つても教師じゃなくて研究者さね。そつ言つのは西村先生達に任せやれ」

蓮夜は学園長の言葉づかいは生徒の教育に良くないとため息を吐くと学園長は蓮夜の助言など聞く気はないよつて苦笑いを浮かべ、

「ばばあにそんな事は期待しねえよ」

「まつたくだね」

「明久、坂本代表！！」

「逃げるぞ。明久」

「了解」

明久と雄二は学園長にはそんなものは期待しないと言い、蓮夜は2人の態度に声を上げると2人は蓮夜から逃げるよつて学園長室を出て行き、

「まつたぐ、あの2人は……学園長先生、申し訳ありませんでした」

「まあ、良いさね。それで久島先生、一応は就業規則とかを説明しないといけないんだけどね。面倒だから、勝手に読んでくれるかい。あたしは清涼祭も近いから忙しいんだよ」

「はい。わかりました」

蓮夜は2人の態度の悪さに頭を下げるとき園長は気にしている様子もなく、蓮夜に就業規則をまとめた冊子を渡し、蓮夜はそれを受け取る。

「それを読んで聞きたい事があつたら、他の先生にでも聞きな。何があるかい？」

「何がですか？ それなら、竹原教頭は何を企んでいるんですか？ そして、学園長先生は明久と坂本代表に『白金の腕輪』を獲らせてどうするつもりですか？」

「……」

学園長は蓮夜も追い出したいようで簡単に終わらせようとすると蓮夜はこりと笑うと学園長と竹原教頭の様子に何かを感じ取つていふようであり、学園長に向かつて学園長の目的は明久と雄一にもう一つ優勝賞品である白金の腕輪を獲らせる事だと聞くと蓮夜の言葉は学園長の目的の核心を突いていたようで学園長は大きく肩を落とし、

「……いつから氣づいてたんだい？」

「いえ、氣づいていると言つまでは至つていなかつたのでカマをかけさせていただいただけです」

「……本当に食えない男だね」

蓮夜にいつから氣づいて居たのかと確認するが蓮夜は学園長の様子から推測しただけで本当は何も氣づいていないと言つ切り、学園長は眉間にしわを寄せた。

第20問

「……白金の腕輪の暴走ですか。それを竹原教頭は利用して文月学園を乗つ取りたいと」

「やつ言つ事さね」

蓮夜は学園長から召喚大会の優勝賞品である『白金の腕輪』には重大な欠陥がある事と竹原教頭はそれを世間に暴いて文月学園を乗つ取る事を考えているは聞き、眉間にしわを寄せると、

「……学園長の様子から今更、白金の腕輪を賞品から取り下げる事はできないんですね?」

「ああ。すでにスponサーには新技術として発表してるしね。それを取り下げる^{ウチ}文月学園は信頼をなくす。白金の腕輪のお披露目で暴走しても同じ、八方ふさがりさ」

蓮夜は白金の腕輪を賞品から外す事は考えられないかと聞くが学園長は首を横に振る。

「まあ、そうですね。確かに明久と坂本代表なら暴走する心配はなれそうだ」

「……久島先生は反対しないのかい?」

「現状で言えば反対はできませんよ。まだ、暴走するとは限りませんしね」

蓮夜は勝ち田があると思つてゐるようすべすりと笑つと学園長は蓮夜の反応に驚いたような表情をするが、

「最悪の場合は優勝した人間が成績上位者なら、回収するしかありませんし、その場合は仕方ないでしょ」

「確かにね。最悪の場合はそうしようかい。久島先生、あのくそじやり2人の事は頼むよ。くれぐれもあまり成績を上げすぎないようにな」

「いや、坂本代表はまだしも、明久がCクラス程度に上げるのは1週間やそこらじゃ無理ですよ。あいつは生糞のバカですから」

「……あたしが言つのもなんだけど、もう少し言葉を選べないのかい？」

学園長は蓮夜の様子を見て、少しでも明久と雄一の成績を上げて貰おうと思つたようであり、蓮夜は学園長の言葉の意図を読み切り、学園長は蓮夜の口から出でてくる言葉にため息を吐く。

「まあ、口が悪くても態度が大きくとも、俺も学園長先生も『教師』ですから、少なくとも竹原教頭は教師じゃないですからね」

「教師ね。あたしはわざわざ言つたけど科学者だよ」

蓮夜は竹原教頭が文月学園を牛耳るのはあまり喜ばしく思つていないようであり、学園長は蓮夜の言葉に少しだけ照れくさくなつたのか蓮夜から視線を逸らし、

「わかりました。そうしておきます。ただ、高橋先生や福原先生、

西村先生、他にも今日みた限りでもこここの先生方は生徒のために努力します。それを作ったのは学園長先生ですから、だから、俺は臨時でもこここの職員として学園長先生を信じます」

「やれやれ、よく、そんな恥ずかしい言葉が出てくるね」

蓮夜は自分は教師ではないと云つて学園長の様子にくすりと笑つと学園長は大きく肩を落とすと、

「それじゃあ、あたしもやれる事をしようかね。久島先生、あたしの用件はもう終わりだよ。わざと出て行つてくれるかい?」

「わかりました。失礼します。学園長先生も無理しないでください」

「わかつてゐよ。身体を壊さない程度に頑張るよ」

学園長は白金の腕輪の修理で忙しそうで蓮夜を追つ払おうとして、蓮夜は学園長の考えが理解出来るよう頭を下げると学園長室を出て行く。

第21問

（さてと、一先ずは就職ができたわけだし、一人でも祝杯をあげますか？）

蓮夜は勤務時間を終えると面接を受けに行つたその日に就職が決まるとは思つていなかつたため、苦笑いを浮かべながら食品とビールを買い込んでいると、

「ん？ 久島先生、夕飯の買い出しつすか？」

「……久島先生？」

雄二が長い黒髪の綺麗な少女と歩いており、蓮夜を見つけて声をかける。

「坂本代表、そうだよ。就職も決まつたわけだし、祝杯をね」

「一人でかよ。ずいぶん寂しいな」

「まあ、いきなりだつたし、週末ならまだしもな……この年になると独り者の友人も少なくなつてな」

雄二は蓮夜の買い物かごのビールを見て、蓮夜をからかうように言うが蓮夜は少しだけ恥ずかしそうに頭をかくと、

「それより、彼女か？ 坂本代表も隅におけないな」

「ち、ちげえよ！？ か、勘違いするなよ。こ、こいつは……」

「……雄一の妻の『霧島翔子』です」

「妻？ まだ、結婚はできない年だから、婚約者か？ 霧島さん、俺は今日からFクラスの担当教師に赴任した久島蓮夜です。よろしく」

蓮夜は話を変えようとしたようで雄一の隣に少女の事を聞くと少女は『霧島翔子』と名乗り、蓮夜は翔子に頭を下げるが、

「ちょ、ちょっと待ってくれ！？ こ、こいつは婚約者でも何でもない。ただの『幼なじみ』だ！！」

「幼なじみから結婚か？ じつへりと愛をばぐくんでいるんだね。俺は応援するよ」

「……久島先生、ありがとうございます」

雄一は翔子を幼なじみだと叫ぶが蓮夜は雄一の中にある感情も感じ取つたようで2人の様子にっこりとほほ笑み、2人を祝福し、翔子は頬を染めて蓮夜に頭を下げる。

「しかし、羨ましいな。こんなにお互いを想いあえる幼なじみがいると言うのは」

「……いや、だから、久島先生、俺の話を聞いて……なあ、久島先生、先生は明久と幼なじみなんだよな？」

「正確に言えば、明久の姉の玲とだな」

蓮夜は翔子の様子に苦笑いを浮かべると雄一は翔子との関係を否定しようとすると、その途中で蓮夜にも幼なじみの女性がいた事を思い出す。

「実は何かあつたとかないのか?」

「玲とか……まあ、その話は置いておこう」

「何だよ。この状況で……」

雄一は反撃だと lagiに蓮夜と玲の話を聞こうとするが蓮夜は雄二の肩に手を置き、

「……坂本代表、覚えておくんだ。間違つても酒に飲まれるな

「お、おひ。つて、何があつたんだ!? 久島先生!? お、俺は聞いちやいけない事を聞いたのか!? つて、言うか、そんな事を生徒の前で言うな!? い、この事を明久は知つてるとか!?」

「……生徒以前に俺は君達の人生の先輩だ。同じ事になりそうな人間にはしつかりとアドバイスはしないといけない。明久には……まあ、知らない方が幸せな事もあるだろ」

「俺だつて、そんなリアルな話は聞きたくないわ!?」

蓮夜は意味ありげな言葉を雄一に送ると雄一は蓮夜の身に過去に何があつたかを理解したようで慌て、蓮夜はこの先に雄一にはそのような事が必ず起きると死の宣告をする。

「……久島先生、吉井のお姉さんにアドバイスを貰いたいから、連

絡先を教えて欲しい」

「しょ、翔子！？ お前は何を言ひ出すんだー？」

「……吉井のお姉さんとは話が合ひやつた。きっと、雄一との事で的確なアドバイスが貰える」

「ぐ、久島先生、おかしな事を聞いて悪かつた。俺と翔子は帰る」

「おひ。気を付けて帰るんだぞ」

翔子は蓮夜と雄一の様子に玲に興味を持ったようであり、雄一は身の危険を感じたようで翔子を引っ張つて蓮夜から逃げるよつと去つて行く。

第22問

「どうした？」

「レンくん、面接はどうでしたか？」

蓮夜が夕飯の準備をしていると携帯電話が鳴り、蓮夜はディスプレイに映る『吉井玲』の名前に電話を取ると電話の先からは蓮夜の幼なじみであり、明久の姉である玲が直ぐに蓮夜に声をかけると面接の手こなえを聞き、

「……なぜか、即日採用で仕事をしてきた

「採用されたんですか？ 良かつたですね」

「まあ、そうだな」

蓮夜は夕飯の準備より、玲との会話を優先しようとガスコンロの火を止めると居間のソファーアに座る。

「それでは久島先生に質問です。新しい勤務先はどうでしたか？」

「ん？ そうだな。昔を思い出した」

「それは毎回、学校を変える度に言つていませんか？ だいたい、私の質問の答えにはなつていません」

「まあ、そりなんだけどな」

玲に返事をすると玲は蓮夜の返事に不満げな声をあげ、蓮夜は電話の先の玲の様子を思い浮かべると、

「そうだ。担当したクラスに明久がいたぞ」

「アキくんがですか？ どうですか？ いつも通り、不細工で甲斐性はなかつたですか？」

「……その言い方は止めろよ」

明久の事を話すが玲の明久の評価は低いようであり、蓮夜は玲の反応に苦笑いを浮かべる。

「それで時差があるからいつもはメールなのに電話をかけてくるなんて何かあつたか？」

「レンくんの声が聞きたくなつただけです」

「ああ。 そりか」

「照れますか？」

「まあ、~~満足~~はしないよ」

蓮夜は玲から電話に彼女に何があったのかと聞くと玲はただ蓮夜の声が聞きたくなつただけだと言い、蓮夜は彼女の言葉に照れたようで首筋をかく。

「そりですか。満足です」

「そりゃ、良かつた

電話の先から聞こえる嬉しそうな玲の声で蓮夜は敵わないと思つていらうであり、

「忘れてました。レンくんに報告しておかないといけない事がありました」

「報告？ 何だ？」

「3ヶ月だそうです。レンくんがここちまで私に会つにきてくれた日のです」

「ちよつと待てー？」

「冗談です。あの時は穴を開け忘れました」

玲は電話の先で子供ができたと言いたいのか意味深に笑うと蓮夜は声をあげるが蓮夜の慌てようには玲の声は少しだけ残念そうである。

「あ、あのな。今の状況でおかしな事を言うな。俺は教師だと言つても臨時教師であつて収入だつて安定してないんだぞ。文月にだつていつまでいられるかわからないんだからな。それに挨拶の前に子供ができたら、俺はおじさんとおばさんになんて言えば良いんだ？」

「大丈夫です。お父さんとお母さん、お義父さん、お義母さんにはすでに了承済みです。知らないのはアキくんだけです」

「……悪い。どこのホントでどこからが『冗談がまつたくわからぬ』。それほどして明久には秘密なんだ？」

蓮夜は玲の様子にため息を吐くが電話の先の玲はすでに根回しは終わっていると言い、蓮夜は眉間にしわを寄せたが、

「決まっています。大好きなお姉ちゃんが大好きなレンくんに手込めにされてると知った時のアキくんの顔を見るのが楽しみだからです」

「……いや、明久は俺と玲の関係を知つたら本気で俺は考え直すようになられる気がするんだ」

「アキくんに反対されたら考え方直してしまいますか？」

「そんなわけがないだろ」

「はい。レンくんなら、やつを言つてくれると信じました」

玲は蓮夜を試すような事を言つが蓮夜の答えは決まっており、玲は蓮夜の答えに嬉しそうに返事をする。

「……試すような事は言わないでくれ」

「せっかく、同じ大学まで一緒に留学したのに先生になりたいと言つて、こつちで決まりかけてた就職も蹴つて日本に帰つてしまつたレンくんが悪いんです」

「それに関しては反省してるので、悪かったよ。さびしい思いをさせてる」

玲は蓮夜と離れているのがさびしいようで口を尖らせると蓮夜は苦笑いを浮かべて玲に謝ると、

「そうです。私がどれだけ寂しいかレンくんはわかつていません」

「いや、まあ、何だ……悪い」

蓮夜は玲の「機嫌を取りたい」ようだが言葉が見つからないようであ
り、

「レーベン、謝られぬと少し懲らへなりやう」

「ああ。そうだな」

玲の言葉に蓮夜は気分を切り替えようと思つたようで一度、深呼吸をすると離れている距離を埋めるようにお互いの今の状況を話していく。

第23問

（……変な話を振らなければ良かつた。いや、待て。昨日の話を考えると相手の事は言つていなかつたんだ。久島先生がその酒に飲まれた時の相手が明久の姉貴とは限らないだろ）

雄一は昨日、商店街で聞いてしまつた蓮夜の話におかしな事が頭をよぎつてゐるよつて眉間にしわを寄せていると、

「おはよつ……あれ？ 雄一、どうかしたの？」

「あ、明久！？ べ、別に何もねえよーー！」

登校してきた明久は何かを真剣に考へている雄一を見て違和感を覚えたよつて声をかけるが雄一は蓮夜の相手が玲だと思い込んでいるため、声を裏返す。

「そつなの？ また、何かして霧島さんに素敵な腕輪をつけられたんじやないの？」

「……あんな事、2度とあつてたまるか」

明久は雄一の様子に翔子と何かと決め付けたよつて机代わりのミカン箱の上にカバンを置くと雄一は翔子に拘束具を付けられ映画館に拉致された時の事を思い出したよつて顔を引きつらせると、

「な、なあ。明久、幼なじみが良くくつくつて話は聞くけどよ」

「何？ 自分と霧島さんの事を言つてるの？ そうだね。雄一みた

いな不細工が霧島さんみたいな美人の隣にいるのは許せないよ

「あ？ てめえ、何だと、バカ久」

「あ？ やるのか？ バカ雄一」

雄一は明久が蓮夜と玲の関係の事を知っているのか気になるようだが、明久の言葉が頭にきたようで睨みあいを始めようとするが、

「待つのじゃ、2人とも、雄一、お主は明久に聞きたい事があったのではないか？」

「そうです。落ち着いてください」

2人のやり取りを見ていた秀吉と瑞希が2人を止める。

「そうだな」

「……命拾いしたな。雄一」

「あ？ それはお前だろ」

2人は秀吉と瑞希の言葉に一瞬、ケンカを中断しようとするが簡単に収まるわけはなく、取つ組み合いになりそうになつた時、

「明久、坂本代表、朝からケンカはしない。席に座れ。HRを始めるぞ」

HRの時間になつたようで蓮夜が教室に入つてきて2人を止めるが、

「レン兄、止めないでくれ。僕はこの不細工をグロテスクに殺さないと気がすまな!?」

「……明久」

「……雄一、命拾いしたな。レン兄に免じて今日のところは引いてやる」

明久は止まる事はなく、雄一につかみかかるとすると蓮夜の声は少し低くなり、蓮夜の様子に明久は身の危険を感じ取ったようで捨て台詞を吐いて自分の席に座ると雄一も蓮夜の顔を立てようと思つたのか明久に続くように席に座り、

「久島先生、HRは久島先生が担当するんですか?」

「違うよ。基本的には西村先生が行うんだけど、今日は3年生のFクラスの生徒が騒ぎを起こしまして生徒指導室に詰めているので変わりだ」

瑞希は昨日の帰りのHRが西村教諭だったのに蓮夜がきた事に首を傾げると蓮夜は苦笑いを浮かべて今朝の状況を話す、

「それではHRを始めましょう……島田さん、どうかしたかい?」

「あの。久島先生、昨日だけで女子生徒5人から告白されたってホントですか?」

蓮夜はHRを開始しようとすると美波は蓮夜に暴動になりそうな事だが気になるようで蓮夜が女子生徒から告白されたと言つ噂の事実を確かめようとする。

「……正確には7人と船越先生からです。当然、断りました」

『『『『殺せ！……』』』

蓮夜は女子生徒からの告白に困っているようで大きく肩を落とすがそんな蓮夜の様子がもてないFクラス男子の怒りに火を点け、教室から叫び声が上がり始め、

「レン兄、逃げて！……」

「ちょ、お前ら、落ち着け！！ 島田、こんなところでそんな騒ぎになりそうな事を聞くな！！」

「そ、そうね。うかつだつたわ。久島先生、逃げて！？」

明久、雄一、美波の3人はクラスメートの暴走に顔を引きつらせながら蓮夜に逃げるよう叫ぶが、

「落ち着きなさい。HRを始めますよ」

蓮夜は身の危険など感じてないようでFクラスの生徒の様子に大きくため息を吐いており、逃げる様子はない。

第24問

「あ、明久、不味いのじゃ、このままでは久島先生が

「わ、わかつてゐるよ。レ、レン兄、お願ひだから逃げて！…このままじゃ、レン兄が！？」

明久と秀吉はFクラスの生徒が嫉妬で人を殺せると思つていいであります蓮夜に全力で逃げろと叫んだ時、

「へ？」

「まったく、HRを始めると言つてているのが聞こえないのか？」

蓮夜はチョークを一本持つと先頭を切つて席から立ち上がり、蓮夜に殺意を向けていた『須川亮』に向けてチョークを投げると蓮夜の手から放れたチョークは亮の額の中心を見事に撃ち抜き、亮の額でチョークは粉々に砕けるばかりか亮はチョークの勢いに負けて後方に吹き飛び、畳に後頭部をぶつけて白目を向き、教室はあり得ない状況に一瞬の静寂が訪れ、蓮夜のため息混じりの声だけが響く。

「お、俺は下手したら、昨日、あれを喰らつていたのか？」

「チョーク投げの威力じゃないのじゃ」

「他にも喰らいたい奴はいるか？ いるなら、一発ずつお見舞いするぞ」

雄一は目の前で起きた白目を向いている亮に顔を引きつりせるが蓮

夜は気にする様子はなく、蓮夜は立ち上がっている生徒達を見てくすりと笑うと生徒達は次々と席に座つて行き、

「あ、あの。久島先生、どうして、チョーク投げなんですか？」

「ん？ 昨日も言つたけど教師はチョーク投げるものだからだ

「えーと、少し古いと思います」

瑞希は蓮夜がチョークを投げる理由を聞くと蓮夜は質問の意味がわからないようで首を傾げ、瑞希は蓮夜の様子に苦笑いを浮かべ、

「そつか？ 僕の高校の時は騒ぐと福原先生に良く喰らつたんだけどな。まあ、もう、7年も前だから古く感じても仕方ないか。まだ、福原先生の威力には届かないって言つのに、やっぱり、投げる時に手首のスナップを加えて貫通力をあげて威力を増さないといけないな。これじゃいつまでたつてもロッカーに穴を開けられない」

「か、貫通力？ レン兄、ちょ、ちょっと待つてよ！？ チョーク投げに貫通力はいらないから、貫通したら困るからね！？」

蓮夜は瑞希の言葉に高校生時代に福原教諭から喰らつたチョーク投げを思い出しているようで苦笑いを浮かべるが蓮夜の口から出るチョーク投げにはあり得ない破壊力に明久は声をあげ、教室の空気は完全に蓮夜を西村教諭と同等の獣扱いの空気になつてているが、

「待て。明久、問題はそこじゃない！？ 久島先生、今、何先生つて言いましたか？」

「何先生つて、福原先生だよ。最初はお前達の担任だつただろ」

雄二だけは蓮夜の口から出た人物の名前が信じられないようで聞き間違いだと思いたいのか蓮夜に確認するが蓮夜の口から出る名前は文月学園の生徒が知っている福原教諭で間違いなく、

「ちょ、ちょっと待つて。レン兄、僕達の知っている福原先生とレン兄の言っている福原先生って同一人物？」

「明久、何を言つてるんだ？ なんでお前らに知らない先生の話をしないといけないんだ？」

明久は重ならない福原教諭の姿に慌てて声をかけるが蓮夜は眉間にしわを寄せると、

「良いか。お前らが残りの約2年の学生生活を無事に過ごすとして怒らせてはいけないのは西村先生や保健体育の大島先生じゃない。福原先生だけは怒らせるな。これは俺の経験談だ。わかつたら返事」

『『『』』』

蓮夜は真剣な表情で福原教諭だけは怒らせるなど言つと蓮夜の様子に先ほどまで蓮夜に殺意を向けていた生徒達は息を飲んで大きく頷く。

第25問

「それじゃあ、今日からは本格的な清涼祭の準備期間になるからな。ただでさえ、このクラスは準備が遅れてるんだ。間違つても野球とかをするなよ」

HRを終えると生徒達は本格的に清涼祭の準備に動き始めるが、
(……基本的にこう言つ事に向いていないんだな)

Fクラスの生徒達は計画性が皆無のようであり、自分勝手に動くだけで作業は一行に進むようには見えず、

「落ち着け。坂本代表、一先ずは掃除から始めよう。明久、お前、
掃除は得意だよな?」

「う、うん。家事は昔からしてるから、得意だけどそれがどうかしたの?」

「掃除の指揮はお前が執れ。この設備じや、掃除に手を抜くなよ。
坂本代表は島田さんと総指揮。後は調理の方は土屋と須川はしばら
くは隅に寝かせておけ」

蓮夜はバラバラに生徒達が動いているのは効率的にも問題があるため、リーダーを決めるが先ほど蓮夜にチョークを喰らった亮はまだ目を覚ましておらず、蓮夜の言葉に生徒達は亮が作業の邪魔になると判断したようで廊下に放り投げる。

「それじゃあ、始めるだ。何かあれば言つてくれ。なるべく、対応

するか」

「レン兄、それなら、洗剤が欲しい。流石に洗剤なしじゃ、この教室はキレイにならない」

「ああ。それなら、ちょっと、職員室に行つて借りてくる……おい。お前達はどうして俺から視線を逸らす?」

蓮夜は何か協力できる事はないかと聞くと明久は洗剤は必須だと手を上げ、蓮夜は洗剤を学園の備品だと思っているため、職員室に向かおうとするが文用学園は甘くなく、

「えーと、久島先生、言い辛いんですけど、Fクラスには貸して貰えないと思つわ」

「Fクラスは基本的に必要なものは自分達で用意する事が前提じゃからのつ」

秀吉と美波はFクラスには洗剤などは貸出されないかも知れないと答え、

「そう言つ事か? そう言えれば、昨日、学園長先生に貰つた就業規則にもそんなような事が書いてあつたな。それなら、購買か」

「久島先生、購買つてどう言つ事ですか?」

「ん? 必要なんだろ。明久、洗剤に何か注文はあるか?」

蓮夜は状況を理解したようで苦笑いを浮かべると購買に行くよつであり、明久に何か指定はあるかと聞く。

「ないけど、レン兄、良いの？」

「ないと進まないんだろ。それくらいは出す。その代わり、遊ばずに真面目にやるんだぞ」

「う、うん」

明久は蓮夜が自腹で洗剤を買つてきてくれる事に驚いているようだが蓮夜は気にする事はなく、

「それじゃあ、行つてくるから、坂本代表、島田さん、仕切りはよろしく」

「お、おう」

「はい。わかりました」

蓮夜は雄二と美波にクラスの事を頼むと購買に言つてしまい、

「……ウチ、久島先生がモテる理由がわかつた気がするわ」

「そうですね。頼れるお兄さんみたいで、ちょっと憧れちゃいますね」

美波は蓮夜が初日にも関わらず女子生徒から告白された理由がわかつたようであり、瑞希は美波の言葉に頷くが、

(……気にするな。久島先生と明久の姉貴が仮にそう言つ関係でも俺には関係ないはずだ。久島先生がモテても関係ない)

雄一はどうしても蓮夜と玲の関係が頭をよぎって行くようで大きく首を振つてその考えを振り払つと、

「始めるぞ」

雄一はクラスの指揮を執つて清涼祭の準備を始めて行く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8230x/>

僕と幼なじみな新任教師？

2011年11月23日21時56分発行